

矢口里菜子 & 舘野泉 デュオ・リサイタル

Rinako Yaguchi & Izumi Tateno Duo Recital

2025年 3月3日(月)19:00開演
紀尾井ホール

7:00p.m., Monday, March 3, 2025 at Kioi Hall

【主催】ジャパン・アーツ

【後援】フィンランド大使館 / 一般社団法人全日本ピアノ指導者協会(ピティナ)

【協力】舘野泉ファンクラブ



私の父はチェリストであったから、生まれて初めて私が耳にしたのはチェロの音だったと思う。私が生まれたその日、父は帝劇でシラーの「群盗」という芝居のチェロを弾いていた。母と産婆さんが待つ家に帰宅すると胡瓜のように細長い子が生まれていたという。

この1月12日、心臓発作のため84歳で急逝した弟の英司もチェリストだった。父から受け継いで愛用していたチェロが、別れを悼むように棺の側に立てかけられていた。

チェロは私にとって大事な楽器で、特にチェロの大国といわれるフィンランドで数多くの素晴らしいチェリストたちと共演してきたことは「魂の糧」とさえ言いたい。

矢口里菜子さんとは吉松隆の「KENJI」で共演して以来、平野一郎の大作「鬼の学校」でも全国17箇所でも共演させていただいた。彼女との演奏を海釣りに例えると、優れた演奏家は皆そうなのだが、海に生きる途方もなく巨大な存在と格闘しているような動きを感じる。自分の精神が強い生命とぶつかり燃えている感じであろうか。

モーツァルトが没年に描いた「女ほど素敵なものはない」は英司と弾くために光永浩一郎に編曲してもらった。何度でも英司と弾きたかった曲だが我々は一度しか共演できなかったのが残念である。

松平さんの作品は緻密な計算と偶然性が重なり合っていて途轍もなく面白い。無辺の宇宙空間を何億年も軌道正しく無表情に漂流する隕石。でもそこでは小さな扇風機が廻っていたり、調子外れの進軍ラッパが鳴り響いたりしているのだ。

ペルトの「鏡の中の鏡」はなんだろう。単純で素直で気取りも何もない永遠に続くような静けさ。夕暮れの光 電車から 小学生がひとり おりた・・・

マグヌッソンのチェロ・ソナタは2012年、マグヌッソン夫人のプリンディスと私の演奏会のために作曲された。火山と氷河、火山礫に覆われて樹木もない大地に間欠泉が吹き上がり壮大な滝がある。昨年9月、私はネパール、ブータン、インドで演奏したが、90歳になって最後にいききたい国があるとすれば、それはアイスランドだ。

cobaの曲を初演したのも2012年。プリンディスとの東京文化会館であった。曲はハバ

ネラのリズムで書かれているが、作曲者は「Tokyo Cabaret」と命名してくれた。60年も前、まだ藝大の学生であった私と英司は御徒町のキャバレーに通ったりした。暑くて汗でムンムンとする混沌とした世界。雑然としたエネルギーが溢れていた。我々は金もない学生であったが、お姉さんたちは気取りもへったくれもなく優しくしてくれた。

館野 泉

.....



館野泉先生との初共演は2021年春、吉松隆『KENJI』（ピアノ・朗読・チェロのトリオ版）であった。その一場面『銀河鉄道の夜』では、館野先生のピアノから立ち昇る凄まじい音のうねりの中で、チェロが叫び、慟哭する。当時私は妊娠5ヶ月で心身共に特別な状況だったことも相まって、あの強烈な体験は深く記憶に残っている。

『KENJI』はまさに物語から生まれた作品だったが、館野先生の演奏を聴いていると、詩や文学の香りだったり、時には祈りの本質のような「ピアノの音を越えた何か」を強く感じる。

美しさの奥に生々しいほどの真実があって、心を別の世界へ連れて行ってくれるようだ。別世界へ連れて行く、といえば、マグヌッソンのチェロソナタ。演奏を重ねるうちに、まだ見ぬアイスランドの荒涼たる大地が見えてきた。

ところで、皆様ご存知のようにいつまでも高貴な佇まいの館野先生、時々発されるスパイスの効いたジョークもまた堪らなく魅力的。

本日はモーツァルトからcobaまで、内容は全く異なる作品連だが、いずれも人間味溢れる音楽をお届けできることと思う。

最後になるが、今年のひな祭りをこのような場で皆様とご一緒出来ることに、心より感謝する。

本日はご来場、誠にありがとうございます。

矢口里菜子

モーツァルト／光永浩一郎(編曲):

「女ほど素敵なものはない」の主題による8つの変奏曲

Mozart (arranged by Koichiro Mitsunaga): 8 Variations "Ein Weib ist das herrlichste Ding"

松平頼暁:Incarnation チェロと左手ピアノのための ♪

Yori-Aki Matsudaira: Incarnation

ペルト:鏡の中の鏡

Arvo Pärt: Spiegel im Spiegel

* * *

マグヌソン:チェロ・ソナタ ♪

Thordur Magnusson: Cello Sonata

coba:Tokyo Cabaret (チェロとピアノのために) ♪

coba: Tokyo Cabaret

♪ 館野泉に捧げる/「館野泉左手の文庫」助成作品

Program Notes

モーツァルト／光永浩一郎(編曲):

「女ほど素敵なものはない」の主題による8つの変奏曲

「モーツァルトの変奏曲“女ほど素敵なものはない”をご存知ですか?」。左手ピアノ独奏版とチェロと左手ピアノ版の2種を編曲して欲しいと依頼を頂いたのは2022年5月15日のこと。恥ずかしながら未知の曲で早速譜面を当たってみた。ここで依頼者・館野泉氏の選曲に脱帽。氏の頭の中にはすでに左手ピアノ曲として鳴り響いているに違いない。またチェロとピアノの版ということも興味を惹かれた。弟君・館野英司氏との共演を想定しての依頼であるがチェリストにとってモーツァルトの新しいレパートリーが加わるのは喜ばしいこと。なぜならモーツァルトは独奏チェロ曲を残さなかったのだから。2023年1月20日にチェロと左手ピアノ版を完成。原曲は作曲家モーツァルトの没年と同じ1791年ウィーンで作曲され同年に出版された。変奏曲の主題は台本作家にして俳優・劇場支配人でもあったエマニュエル・シカネーダーの劇「愚かな庭師」に付

けられた旋律から採られた変奏曲。編曲に当たって Breitkopf und Härtel 版と Wiener Urtext Edition 版の譜面を参照。へ長調4分の3拍子。序奏付き主題と8つの変奏による作品。編曲においてチェロとピアノは対等に扱われ両者は対話を交わしつつ次第に共鳴する。**主題と第1変奏**は原曲に忠実ながら対話様式を採る。バロック風の**第2変奏**は特徴的な低音部のリズムをチェロに委ねた。三連符が活用された**第3変奏**はピツィカートやアルペジオを採用。16分音符の細かい音型による**第4変奏**、**第5変奏**は流麗なピアノのテクスチュアにトレモロ奏法によるチェロのテクスチュアを重ねた。**第6変奏**はテンポが緩み主部はへ短調でシンプルなテクスチュア。再現部でピアノパートは原曲より1オクターブ下げて提示される。まるでオルゴールのゼンマイ仕掛けが停止しそうな**第7変奏**アダージョはほぼ忠実に原曲をなぞりチェロは低音部をささえる。ラスト**第8変奏**は序奏が省かれるが主部は拡がりを見せ主題は対位的に展開しカデンツァ風のパッセージも現れる。2つの楽器から最大限のソノリティを引き出すためハーモニーに基づき自由な編曲を施した。

シャックの「愚かな庭師」のリート「女ほど素晴らしいものはない」による8つの変奏曲 K.613 へ長調(ウォルフガング・アマデウス・モーツァルト作曲)
チェロと左手ピアノ用編曲版(2023)によせて(光永浩一郎)

松平頼暁 (1931-2023):Incarnation チェロと左手ピアノのための

音域(高中低)と単位時間当たりの音数=密度(密中疎)を各3段階に分け、それぞれの組み合わせを作り、それをランダムに並べる。

さらに、その並びを、二つの楽器で重ね合わせる、という作業を行う。その間、Vc(チェロ)では2本の弓による演奏など、特殊な奏法も用いられる。Pf(ピアノ)もペダルを蹴るなどの打楽器的奏法が指定されている。音組織としては、ピッチ・インターヴァル技法による音列(隣接音間の音程差が短2度から長7度まで含まれている、及び、全音程が含まれる)を基にしている。

2012年、館野泉フェスティバルvol.4(絆〜優しき仲間たち)(2013年3月3日東京文化会館小ホールにて開催)のための委嘱作品として、多井智紀と館野泉のために作曲。(松平頼暁)

アルヴォ・ペルト (1935-):鏡の中の鏡

アルヴォ・ペルトの『鏡の中の鏡』(1978年)は、彼の特徴的な作曲技法「ティンティナブリ(tintinnabuli)」を用いた作品で、無限に続く鏡像を音で表現している。単純で繰り返しの音型は、まるで時間の流れをとめたような錯覚、静寂、美しさの中の儂さ、または、内面的な平和を感

じさせるなど、ききてを深遠な世界へと誘う。

ヴァイオリン、チェロ、クラリネット、ホルン、オーボエなど様々な楽器に編曲され演奏される人気の高い楽曲で、その編成によって異なる色彩感が醸し出される。

ソールデュル・マグヌソン (1973 -): チェロ・ソナタ

このチェロと左手のためのソナタは、館野泉の依頼により作曲したものであり、館野氏と私の妻であるチェリスト、プリンディス・ハラ・ギルファドッティルに献呈する。

2012年10月から2013年4月の間に作曲。

5つのやや性質の異なる楽章で構成され、伝統的な意味のソナタ形式に漠然と基づいている。

第1楽章はスケルツォを直接導くための前奏曲的な役割をはたしているため、この曲は第1楽章のないソナタのように聴こえる。伝統的な緩徐楽章があり、ロンドもあるが、最終楽章は延長されたコーダの役割をはたしている。(S.マグヌソン)

第1楽章 レント Lento

第2楽章 ヴィヴァーチェ Vivace

第3楽章 レント Lento

第4楽章 アレグロ Allegro

第5楽章 アンダンテ Andante

coba (1959 -): Tokyo Cabaret (チェロとピアノのために)

館野さんのために2曲目の作品を書かせていただく光栄に預かった。今回はチェロとのデュオ曲にした。

Tokyo Cabaretは、東京という誇大妄想都市でうごめく人々をハバネラのリズムに乗せて描いた作品だ。ハバネラは、情念、苦悩、エロス、策略、嫉妬などを彷彿とさせる、何とも魅力的なラテンのリズム形態だ。

曲中でハバネラは、単語の特殊なリズム形式ジュンバ(Yumba)に変容し、混沌へと導く。

純真と欲望の狭間に見え隠れする儂く切ない夢が、ポップソングの泡の様に現れては消えて行ってくれたら、この曲は多分成功です。(coba 2013.4.30)



矢口里菜子(チェロ)
Rinako Yaguchi, Cello

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校、東京藝術大学音楽学部を経て、ドレスデン音楽大学にて研鑽を積む。第31回霧島国際音楽祭賞。第10回ビバホールチェロコンクール第1位。ソリストとしてザクセン州立警察オーケストラ、山形交響楽団などと共演。小澤征爾音楽塾に参加。BSテレ東「エンター・ザ・ミュージック」にて、ナビゲーターの藤岡幸夫氏プロデュースによる弦楽四重奏団・The 4 Players Tokyoのメンバーとして定期的に出演している。山形交響楽団 首席チェロ奏者。



館野 泉(ピアノ)
Izumi Tateno, Piano

88歳。クラシック界のレジェンド・ピアニスト。領域に捉われず、分野にこだわらず、常に新鮮な視点で演奏芸術の可能性を広げ不動の地位を築く。2002年に脳溢血で倒れ右半身不随となるも、しなやかにその運命を受けとめ、「左手のピアニスト」として活動を再開。これまで館野泉の左手のために10ヶ国の作曲家により130をこえる作品が献呈されている。2020年演奏生活60周年記念演奏会、2023年米寿記念演奏会の全国ツアーは大反響をよんだ。2025年は、卒寿記念演奏会を全国各地にて予定。